

教育機関展開例における評価 IPE に関する研究

研究分担者 渡辺 美保子 ポラリス保健看護学院

研究要旨

平成 29 年度に実施した IPE（専門職連携教育）に参加した 6 職種 34 名の学生の学習成果を調査研究した。IPE は 3 回実施し、1 回目は平成 29 年 7 月 5 職種 18 名、2 回目は同年 9 月 2 職種 4 名、3 回目は同年 10 月 4 職種 12 名が参加した。IPE 実施前後に専門職としての態度や認識を調査したところ、看護学生群、看護学生以外群ともに実施後に総得点の平均がプラスに変化した。また、IPE 実施を経て 5～7 か月後（卒業時）に看護学生を IPE 参加群、不参加群に分け CICS29 を用いて多職種実践能力評価を行い、29 項目の回答の平均値比較をした結果、「患者を尊重した治療・ケアの提供」「専門職としての役割遂行」で参加群の平均が有意に高い結果となった。学生には IPE が多職種カンファレンス等の実践へのニーズを引き出す学習になっていること、教員には IPE に対する認識が高まり、参加人数制約の工夫をしながらも IPE への参加期待があることが示唆された。

A. 研究目的

IPE（専門職連携教育）は、それぞれの職種の専門性に対する理解を促し、今後の地域包括ケアに求められるチーム医療を担う人材教育のために非常に効果的な教育方法となりうる。平成 29 年度に実習の一環として多職種連携教育研修を企画し実践した。目的は、総合病院が臨地実習の場として受け入れている医療関係職種養成施設が連携し相互協力することによりチーム医療推進のために必要な基本的知識・技能・態度を習得できるようにすることである。実習に参加した学生は 6 職種 34 名であった。

本研究は、看護師等学校養成所における専門職連携教育展開例として、短期間研修例を提示し、その評価を実施することを目的とし

た。

具体的な調査目的は以下の 3 点とした。

- 1) IPE 実装前後で専門職者としての態度や認知に変化があるか評価する。
- 2) 看護師等学校養成所の学生で IPE に参加した者と不参加の者で卒業時の IPE の成果が異なるか CICS29（Chiba Interprofessional Competency Scale 29[1]）による専門職連携実践能力の自己評価得点である。CICS29 は、プロフェッショナルとしての態度、信念 6 項目、チーム運営のスキル 5 項目、チームの目標達成のための行動 5 項目、患者を尊重した治療・ケアの提供 5 項目、チームの凝集性を高める態度 4 項目、専門職としての役割遂行 4 項目から構成される信頼性妥当性が確保された尺度である。）で評価する。

3) IPE 参加校の学生と教員の IPE に関する評価及び課題を明確にする。

B. 研究方法

1. 実施されている IPE の概要

看護学生は看護師等学校養成所指定規則の「看護の統合と実践」の統合実習の一環として、IPE に用いる症例に関連する病棟で実習している学生 16 名が参加した。

総合病院で実習している看護学校の 4 年生および看護学生以外の医療関係職種養成施設（看護師、薬剤師、臨床工学技士、理学療法士、作業療法士、臨床検査技師等の専門職の養成所学校）が、それぞれの実習期間内で 2 種以上の学生が実習する日程を調整し、診療参加型 IPE を実施した。

本実習の学習内容は参加者それぞれの学校紹介、受け持ち患者紹介、診療経過に沿った病院内 11 部署の見学、退院に向けた多職種カンファレンスの実施であった。これらの内容を合計 6 時間で実施した。

IPE の企画調整、学生のグループワークのファシリテーションは、研究者と IPE を実施した総合病院の医療従事者（看護師 1 名、薬剤師 1 名、臨床工学士 1 名、理学療法士 1 名、教育研修センター員 1 名）の合計 5 名であった。本 IPE は 7 月、9 月、10 月に 3 クール（各クール 6 時間で日数は 1~2 日間実施した）。

2. 調査期間

調査期間は 2017 年 7 月から 2018 年 3 月であった。

3. 調査目的ごとの調査対象および調査方法

調査目的 1) に対して、調査時期は、2017 年 7 月から 10 月であった。IPE 参加学生 34 名を対象とした。学生の所属は、看護学生 16 名、薬学生 9 名、臨床工学士学学生 3 名、理学療法士学生 4 名、作業療法士大学学生 1 名、

臨床検査技師大学学生 1 名であった。

調査内容は研究者が文献検討²⁾を行い作成した評価項目 21 項目を用いて、実習前後で学生による自己評価を実施した。

評価項目の内容は、専門職者の態度育成 6 項目（1 保健医療福祉の動向に関心がある、2 多職種連携教育研修に興味がある、3 人の話を聞くことに興味がある、4 自分の考えを伝えることが得意である、5 物事について深く考えることが好きである、6 相手を尊重することができる）、組織一員の態度育成 5 項目（7 チーム医療推進を考えることに関心がある、8 複数の人との双方向コミュニケーションがとれる、9 多職種間で医療の目標を一致させることの大切さがわかる、10 多職種間で知り得ている情報を共有することの大切さがわかる、11 患者中心の医療に多職種連携は欠かせないと感じている）、専門職者の認知理解育成 5 項目（12 自部署の業務がどのように医療チームに活かされているかがわかる、13 医療チームの一員として自部署が果たす役割がわかる、14 自分の資格がもつ魅力がわかる、15 個人の行動がチームにどのように影響するのかがわかる、16 研修後、臨地実習に活かす自部署の内容が明確である）、多職種の認知理解 5 項目（17 他職種の業務内容がわかる、18 多職種の連携がどのように行われているかがわかる、19 チーム医療の実践で患者の安全確保がどのように行われているかがわかる、20 多職種で協働し医療を実践する価値について説明できる、21 職種間コミュニケーションの重要性がわかる）であった。これらの項目に対して、5 段階リッカート尺度による回答を求め、21 項目合計平均得点を、IPE 実施前後で比較した。

調査目的 2) に対して、調査期間：平成 30 年 3 月であった。調査対象は、看護師養成所 4 年生の 7 月から 10 月の診療参加型 IPE 参加

者の16名(臨地実習病棟がIPEに用いる症例に関連する病棟が否かで参加群と不参加群に分けた)IPE不参加者の23名である合計39名とした。

調査内容はCICS29を用い、この得点を診療参加型IPEに参加した学生と不参加であった学生で卒業時に比較した。

調査目的3)に対して、調査期間：平成30年3月であった。調査対象は、看護学生2名、および教員1名、薬学生3名および教員4名であった。

調査内容は、学生にはIPE参加後の学習への影響や、成果について、教員にはIPE実施への課題や成果(カリキュラム、実施時期、学生のレディネス、学生の反応とその後の学習への影響や成果についてインタビューを行った。インタビュー結果より逐語録を作成し、KJ法を用いて分析を行った。

4. 倫理的配慮

研究の主旨及び次の1)~4)を含め倫理的配慮及び利益相反の審査を公益財団法人星総合病院倫理審査委員会より受け、承認を得ている。

1) 研究等の対象となる個人の人権擁護

調査用紙は無記名とした。IPEに参加する際に研修の目的と成果をまとめる説明を行い、記載内容が実習評価等に反映しないことを明確に説明した。

2) 研究等の対象となる者に理解を求め同意を得る方法

IPE参加前後の評価の実施と調査結果を研究としてまとめることを口頭説明し、回答の有無を以って同意とした。看護学生の参加、不参加者の比較に使用する調査用紙は文書による説明を行い、文書で同意を得た。

3) 個人情報の取扱い

すべてのデータは匿名化あるいは暗号化し

た。

4) 研究によって生じる可能性のある、対象者にとっての危険性又は不利益事項の説明

この研究を行うにあたり、対象への危険性や不利益は生じないことを説明した。

C. 結果

1. IPE実施前後で専門職者としての態度や認知の変化

調査目的1)に関する調査票を用いて回答を得た専門職者としての態度や認知に関する評価について、実施前後の合計得点の差を職種別(看護学生と看護学生以外の学生)で比較した。

その結果、看護学生は実施前の合計得点が81.7点(n=16)で実施後が86.8点、変化の差が5.1点であった。看護学生以外は実施前の合計得点は74.8点(n=18)で実施後が87.0点、変化の差が12.2点であった。

看護学生以外の学生では「多職種の業務内容がわかる」、「多職種で協働し医療を実践していくことへの価値について説明できる」、「多職種の連携がどのように行われているかがわかる」の得点平均が増加していた。

2. 看護師等学校養成所の学生でIPEに参加した者と不参加の者とのCICS29の総得点の比較

IPE参加者(n=16)の平均値114点、中央値111点、最頻値109点・116点、最小値94点、最大値145点であった。IPE不参加者(n=23)の平均値109点、中央値116点、最頻値116点、最小値87点、最大値144点であった。

対応のないt検定で推測統計を行った結果、診療参加型IPE参加者のCICS29得点が有意に高かった(p=0.0003)。

下位尺度のカテゴリー別に平均値を比較した結果、「患者を尊重した治療・ケアの提供」で参加者平均 4.14、不参加者平均 3.94 ($p=0.005$)、「専門職としての役割遂行」で参加者平均 3.99、不参加者平均 3.74($p=0.0008$)と有意に高かった。

3. IPE 参加校の学生と教員が考える IPE に対する成果と課題

(1) 看護学生が認識した成果

KJ 法(複数の多様な意見を類似性や共通性のあるもの毎にグループ化し、これを繰り返し大カテゴリーまで構造化していく手法)を参考に分析し、3 の大カテゴリー、10 のサブカテゴリー に分けラベリングした。ラベルは『』で示す。

『患者ケアの促進』

様々な視点から対象を見ることでより厚みのあるケアができると思った。多職種が関わって患者のサポート体制が充実し安心感を与えることができた。看護職に足りない専門職の視点や介入があることで患者のより良い治療につながると思った。患者の不安に応じて専門職に繋げることができた。

『保健医療福祉システムにおける看護の役割』

看護職は情報発信が重要であると考えた。看護職は多職種間や患者との間に入り、情報の橋渡しやアドボケートの役割があると理解した。

『チーム医療の実践への意欲』

多職種の学生とアセスメントや看護計画を立ててみたい。事例に沿った援助について他学生と学びたい。一人患者を挙げ各職種のアプローチを考え共有するカンファレンスを行いたい。

(2) 看護学校教員が認識した成果と課題

KJ 法で分析し、2 の大カテゴリー、4 のサブカテゴリー に分けラベリングした。

『学生の成長』

患者にかかわる多職種の存在で退院支援の視野が広く、視点が早くなると感じた。看護職の役割拡大や重要性について考える機会となった。

『IPE の資源と制約』

看護学生の人数が多く有効なカンファレンスのための人数調整が必要であった。他学校の実習指導教員が不在で情報共有ができなかった。有効なファシリテーターの存在が必要であると感じた。

(3) 薬学生が認識した成果

KJ 法で分析し、3 の大カテゴリー、8 のサブカテゴリー に分けラベリングした。

『実務実習』

チーム医療の目標がわかり正しい姿を創造し薬剤師としてどう関与するか考えることができた。各職種のアプローチの違いも理解でき職種の壁がなくなった。シミュレーション研修(看護師等学校養成所で行う模擬的訓練の授業)に参加してみたいと感じた。

『患者視点』

今までの病院実習では患者を診ずに薬だけに注目していたが、今は患者がどのような薬を飲んでいるのか、腎機能は大丈夫なのかと考えるようになった。患者に対する思いほどの職種も同じだと理解できた。実習中の患者さんと看護学生とのエピソードを聞いてみたいと感じた。

『キャリア』

理想の多職種連携を見ることができ、病院の中の薬剤師の魅力も感じた。薬剤師としてこういうことがやりたいという気持ちで職場選択を行いたいと思った

(4) 薬学部の教員が認識した成果と課題

KJ法で分析し、3の大カテゴリー、4のサブカテゴリーに分けラベリングした。

『時期』

臨床実習中にIPEに参加できることはよいことであり、実習期間も長期間なので薬学実習への影響もほとんどなかった。

『人数』

臨床実習に参加している学生だけの参加で致しかたない。参加した数名の学生が大学に戻り共有会で発表した。

『内容』

薬学部では患者の診療過程を知り学習するための症例を集めて学習することができないので、カンファレンスは大変勉強になった。学習に幅があるので症例を沢山教えてほしいと感じた。病院はもちろん、病院と地域との連携の部分も学生に見せたいと感じた。

D. 考察

1. 診療参加型短期間 IPE の短期的効果

チーム医療を目指した多職種連携は各学校で机上学習は可能であったが、実践レベルで実現するには多くの資源とマネジメントが必要であろう。今回、診療参加型 IPE において、他職種の役割や活動内容を理解し患者ニーズを全員で考え、ケア構築していくことを体験したことで、学生は専門職者としての態度や認識を向上させたと考えられる。

特に、実施前は看護学生の合計得点が高く看護師等養成所のカリキュラムの広域性が示唆されたが、実施後には看護学生以外の職種が看護学生の前後変化を上回り、総得点平均が同等になったことも注目したい。IPE にはどの職種が中心になるかという概念はない。全ての職種が同等に患者家族に関与し支援していくことの望ましさを考慮すると、今回の結果でチーム医療としての学習成果が期待で

きる。

2. 診療参加型 IPE の長期的評価

看護師等学校養成所の学生で IPE に参加した者と不参加の者との CICS29 の総得点の比較と回答の平均値の比較を行った。

今回、IPE に参加した学生と不参加の学生の違いは、臨地実習病棟が IPE に用いる事例に関連する病棟が否かで参加群と不参加群に分けていたため、その他学習成績や IPE の関心度は、ほぼ考慮せずランダムに割り付けられている。さらに IPE に参加してから最短で 5 か月、最長で 7 か月経過してからの CICS29 の調査であり、その間新たに IPE の学習や実習を取り入れてはいない。

IPE 参加群と不参加群の 29 項目全体の回答平均値を比較した結果、IPE 参加群では合計得点が 114 点で 6 つの下位尺度すべての回答平均が 0.09 ~ 0.27 点上回っていたことがわかった。かつ、「患者を尊重した治療・ケアの提供」と「専門職としての役割遂行」の平均値は、前者が 0.2 点、後者が 0.25 点上回り、有意に参加学生グループのほうで平均値が高かった。以上から、短期的な診療参加型 IPE は看護学生の専門職連携実践能力を向上させることが示唆された。

3. 学生と教員による IPE の評価と課題

臨地実習中に IPE に参加する学生数は、カリキュラムの特徴によって困難であることがわかった。また、臨地実習病院の理解と人的・物理的資源等の協力がなくとも成果のある IPE の実施は困難である。学校という場で症例ワーキングを行うには、場所は提供できるが複数校のカリキュラムを合わせることが懸念事項で、病院という場で体験型共同学習を行うには日程調整と場所の提供は可能だが、

人数確保が困難で全員体験できないことが懸念事項であることがわかった。

医療福祉に関連する学生にとって平等に臨床という場の理解ができること、専門職の理解と患者理解とともに多職種連携の重要性を適切に認識できたこと、さらには認識しただけにとどまらず、学生の学習ニーズは多職種の学生間で患者により良いケアを考えるための多職種カンファレンスと計画立案まであり、IPE が実践のモチベーションを高める効果を示唆していることも理解できた。

E. 結論

1. IPE は、参加した学生すべてにおいて専門職への理解と態度形成、多職種連携への理解と態度形成に有効であることがわかった。
2. 看護学生において IPE に参加した学生は参加しなかった学生に比べて、専門職連携実践能力の自己評価が高く、特に「患者を尊重した治療・ケアの提供」「専門職としての役割遂行」の実践能力評価が高かった。
3. 学生及び教員ともに学習の成果を認識していた。学生からはチーム医療の推進と役割

の認識だけではなく実践に向けたモチベーションも獲得していることが分かった。教員からは IPE のカリキュラム上の制約はあるが工夫して学習成果を波及したいと検討していることが分かった。

文献

1. Sakai, I., et al., *Development of a new measurement scale for interprofessional collaborative competency: The Chiba Interprofessional Competency Scale (CICS29)*. J Interprof Care, 2017. **31**(1): p. 59-65.
2. 春日淳志ら ; 医療保健福祉分野の多職種連携コンピテンシー, 2016年3月31日, 第1版, p 11 ~ 12 .
http://www.hosp.tsukuba.ac.jp/mirai_iryu/pdf/Interprofessional_Compentency_in_Japan_ver15.pdf (2018年5月31日閲覧)

図1 専門職者としての態度や認知に関する
評価得点平均の実習前後の比較

